

FDニュース

発行日 2013年 2月 15日

1 FD講演会報告

目次：

FD講演会報告	1
国際グッドプラクティス	2
レッスンシェア	3
H24年度前期授業アンケート集計結果について	4

12月6日の専任教職員会の後に日本大学文理学部の梶川信行教授を招いて、「古典教育のためのデジタル教材についてーパソコン音痴の気ままなFD活動ー」と題してFD講演会が開催された。講演会は活発な意見交換もあり、意義深いものとなった。

(文責 長嶺宏作)



講演は梶川教授がFDに関わる契機となった背景から説明された。日本大学文理学部では新校舎が建設されたことにより、多くの教室にプロジェクターが完備されることになった。このことで、デジタル教材を授業のなかで使用することが容易になっている。また同時に、文理学部ではFD活動にも力を入れて、授業改善に寄与する活動に対しては補助金がだされる制度がつけられた。梶川教授は、それを使ってFD活動に参加することとなった。この経験からFD活動の意義は、公開することだけが重要であるわけではないが、公開することで自己完結している授業が人に見られ、自分の授業を見つめ直す機会となった。

梶川教授のFDの一環として取り組んだ具体的なことは、次のような活動であった。梶川教授は学生の指導として授業改善はもちろんのこと「卒業論文の手引き」と「合同合宿」を行っている。「卒業論文の手引き」は、梶川教授のゼミナールの学生が中心となって作成したもので、卒業論文を作成するにあたって、学ぶべき内容をしめした。特に、上代の研究には読まなければならない参考文献がいくつかあるために、それを明示することで学生の学習に筋道をつけることを目的としている。さらに、そうした学習内容をゼミナールだけではなく、他大学との合同合宿することで新たな視点や学生同士が刺激あって良い学習環境を生んでいる。また、合同合宿を通して、同じ分野においても各教員には指導のポイントが異なり、異なる視点からの指導ができています。

次に梶川教授は、FD活動の一環として具体的な授業においてデジタル教材を導入のメリットについて説明された。古典は同じ日本を扱っていながらも、特に上代は異文化理解という面が強くなる。つまり、現代世界の感覚ではわからない世界を認識させることが重要である。この点からも上代の世界をイメージしやすいように授業でデジタル教材を使い、視覚的に見せるようにした。万葉集で出てくる「大和三山・三輪山」といっても、関東に住む学生には地理的な感覚や情景が思い浮かばない。それを写真で見せることでうまく伝えられる。あるいは、歌会や舞の歌った際に、どのような場所で行われていたのかを写真などで示すと学生は理解してくれる。

このようなイメージを理解させることだけではなく、古典の研究では、文の構造を色分けして示すことで長歌の構成や枕詞のつながりを示す。古典はIT技術と縁遠いように見えて、近年ではIT技術が活用されて構造分析が行われている。そうした成果を学生に示すと、驚きとともに新しい視点で学生が古典に興味を持ってきている。

最後に会場からはいくつかの質問された。一つは授業での文法の取り扱いについてである。古典は高校時代から文法の授業を受けているが、それが古典嫌いを生んでしまっている現状があるために梶川教授は文法を積極的に教えないと説明されたが、どこかの時点で文法を教えているのかという質問があった。それに対して梶川教授は、もともと上代の古典は学校で教えられている学校文法では説明できないことが多いために参考にならないので教えていない。

もう一つの質問は、視覚的な教材を使うとメリットとして学生が興味を持ってくれるが、デメリットとして学生が自ら考え学ぶ力がつかないという葛藤があると感じるが、梶川教授はどのように工夫しているのかという質問であった。梶川教授は、その点については同じような問題認識を持ち、双方向的な授業を行うことで補っている。例えば、問題設定をして、コメントシートに学生自身の意見を書かせている。また、視聴覚教材を使った授業は1年生など入門的な授業では有効であるが、ゼミナールでは使わなくなっている。入口での興味を持ってもらい、深く学ぶにつれて文字のテキストの中心として学習している。



2 国際グッド・プラクティス：井上健教授

「国際グッドプラクティス」では、日本大学国際関係学部・短期大学部で行われている特色ある授業実践を紹介します。今回は井上健教授の「日米比較文化」の授業にお邪魔しました。今回の授業では1920年代から1930年代の日本の映画史の展開を題材にしながら、アメリカ文化の受容と比較が講義されていました。（インタビュー：長嶺宏作）

長嶺：授業で興味深かったのは映画の形式、無声映画であれば弁士がいて非常に説明が多く、トーキーが出てから字幕スーパーが登場し、字幕の字数制限からハードボイルドのような紋切り型のセリフが多い映画が流行するというのがありました。それを聞いてメディアの形式が内容を選んでいくようにも感じたのですが？

井上：この講義では、主に1920年代、30年代を対象としています。この時代は大幅な技術革新の時代でもありました。この時期に、芸術の分野でもっとも成長著しかったのが、ともにアメリカが主導権をとった映画と写真です。ことに映画は、1920年代後半に、サイレントからトーキーへ移行していくという、大きな転機を迎えます。その意味では、たしかに、多くのモダン・アートの中で、メディアが内容を規定する度合いが、もっとも大きかったのが映画であると申せましょう。我が国においては、トーキー化はすなわち字幕化でもありました。日本の字幕技術はかなり精度の高いものですが、それでもそこに必然的に、得手不得手が出てきます。総じて台詞の短い、行動中心の映画は、その分、字幕に乗せやすく、議論が延々と繰り返られるような映画は、やはり字幕には不向きなのです。これもまた、メディアの形式が、受容すべき内容を規定した例と言えるでしょう。

長嶺：教育学でも同じような問題があって、授業の形式が授業の内容を規定するのか、あるいは、授業の内容が授業の形式を規定させるのか、という問題がありますが、文学ではどのように考えるのでしょうか？

井上：内容と形式の相関・相克は、美学、芸術学、哲学の永遠のテーマでもありますが、これは結局、内容が形式を規定し、そうして規定された形式が、今度は内容を規定するといった、ある種の、解釈学的循環を起こさざるを得ないものだと思います。文学作品の解釈・研究の場合は、作品テキストの内部（記号表現、言語内容）と、テキストの外部（文化、歴史、社会、制度、政治など）とを、どうつなぐかというのが、やはり永遠のテーマで、これまた、言語学的？循環を繰り返していくしかないものなのでしょう。ただ、こうした「循環」も程度は様々で、われわれとしては、少しでも質の高い「循環」を提示し、それを学生とともに体験していく義務を負っているわけです。

長嶺：そうですね。また、先生の授業を聞いて、最初に概念や全体像を示していくやり方だった気がします。どういう意図があるのでしょうか？

井上：これはどの分野でも同じなのかと思いますが、分析の道具である概念を確定し、使う方法を明確にしないと、そもそも議論も講義も成り立ちません。戦後

処理の問題を国際レベルで議論するならば、やはり「戦後」という概念を共有するところからはじめなくてはならないのと同じ理屈です。ある文学作品を幻想的だ、幻想文学だと言うならば、幻想をいかなる意味で用いているかについて、話し手と聞き手との間で、認識が共有されている必要があるでしょう。まずは、共有可能な程度に概念規定をしておいて、実地の場での具体的検証過程で、その概念を修正し、精緻にしていくことが重要と考えています。つまり、概念を与えて、使って見せて、学生にも参加して使ってもらいながら、その概念を修正し、洗練していくというやり方です。

長嶺：なるほど、この授業でも映像をみるときにも見方を説明されていましたね。

井上：言語に文法があるように、映像にも文法があります。あの授業では、最低限度の映像の文法を教えるから、映画を見せました。私の講義は映画をメインにした授業ではまったくありませんが、もしそうであったならば、あと2、3時間使って、映像の文法をしっかりたたき込む必要があるでしょう。

長嶺：先ほどの質問と重なるかもしれませんが、映像でも文学でも、それを知的な活動まで引き上げるのは大変だと感じています。ただ面白かったというものから、何が描かれて、何が表象されているのか、というレベルまで認識まで到達するというのには、何か、お考えはありませんか？

井上：「ただ面白い」のレベルから、どうやって引き上げてやるのか。映像の文法をしっかりたたき込んでやった上で、勝手に考えるというのが昔ながらのやり方だとすれば、今求められているのは、「ただ面白い」のレベルを、授業の中で、「なぜ面白いのか」まで高めてやる作業です。それには、今見ている、読んでいる、映像作品、文学作品を取り囲むメタレベルに位置するものを、わかりやすく言えば、同時代思潮や支配的なエートス（支配的心的態度）や史的枠組みのようなものを、適宜、提示してやって、考察のプロセスそのものを立体化してやるのが一番ではないかと考えます。

ただ、自分自身で最大の問題点だと考えているのは、授業がなかなかうまく双方向になってくれないことです。というか、双方向にもっていく努力が足りないことです。2回に1回くらいの割合で、リアクションペーパーを書かせ、一般性をもつと考えられる質問については、次回の授業で紹介するなどしているのですが、ともに考え、発見に結びつけていく、という形にはなっていません。知識や学術情報を、より多く、わかりやすく伝えることに重点が置かれすぎていて、一方的になりやすいというのが、最大の反省点です。

長嶺：今日は、ありがとうございました。

3 レッスン・シェア：実践力の養成

① 篠原啓子准教授：社会で活躍する実践力のある栄養士育成のために



篠原啓子准教授に普段の授業の様子をインタビューしました。

太田：先生はどのような講義、実習および演習科目をお持ちでしょうか？少し内容をわかり易くご説明ください。

篠原：担当科目は「栄養教育論」「栄養教育実習」とその特論です。栄養指導対象者にどのように動機づけるか、また栄養教育の計画を立てる方法を教えています。

太田：講義、実習および演習とタイプの異なる授業で、それぞれに対して短大生や専攻科生の反応はどのようでしょうか？長所や問題点があれば教えてください。

篠原：栄養教育の為の媒体（リーフレットなど）を手作りするのは上手なのですが、伝える内容がやや薄いこと、インターネットから集めたたくさんの情報の中から取捨選択することが苦手のようです。

太田：先生が工夫されている点をお聞かせください。

篠原：学生時代は情報を集める立場にいますが、彼らは社会に巣立つと、たちまち情報の送り手にならなければなりません。私の授業は即ち、栄養教育の実践方法を伝えることそのものだと思っています。ですから、講義ではパワーポイントを積極的に取り入れ、実習では3分間スピーチやブレインストーミングなどを取り入れて、人に自分の考えを伝えたり考えをまとめる能力を養えるような授業方法を心がけています。

太田：学生諸君への要望、励ましのお言葉をお願いします。

篠原：栄養教育は食べる、活動する、眠るなど誰もが行う行動に働きかける仕事です。何気ない日常生活の積み重ねが栄養教育の大事なスキルになります。大学生生活をおおいにエンジョイして心のアンテナに磨きをかけてください。

(太田尚子)

② 杉本宏昭准教授：英語の力を鍛える



杉本宏昭准教授の「英語Ⅲ」の授業にうかがいました。「英語Ⅲ」はスピーキングに力を入れた授業で、12名程度の少人数で行われています。

長嶺：授業で驚いたのは、とにかく学生に英語を話させるんですね。

杉本：はい。英語はある程度、繰り返し聞いて、繰り返し話すという作業をやらないと、一定レベル以上を超えられないというところがあるので、この授業はスピーキングを目的としていることもあって、学生に英語を話す時間をできるだけもたせようとやっています。

長嶺：私などは講義で説明していく授業が多いので、この授業のように目標が明確にされて実践的に展開されているのには、ある意味で新鮮でした。

杉本：そうですね。この授業では、あまり細かい発音や単語の意味や文法という説明を行っていません。それは授業の目的が英語のシャワーを浴びさせて、英語を発音させて、感覚的に発音や文の構造が分かってもらえればと考えているからなんです。

長嶺：それと授業の構成が非常にはっきりしていると感じました。良い意味でパターン化されているなど。

杉本：この授業では簡単に発音や文の説明をワンパラグラフごとに行って、それを黙読・暗唱をさせます。次に全員でコーラスリーディングを行って、次に倍速で流れる音声の後にフレーズごとに発音させて、そして、二人一組になっ

て、お互いに暗唱できているか、発音できているか、スラスラと発音できているかを確認して、最後に、通常の早さで流れる音声で確認する。というシンプルな構成となっています。

長嶺：こういう授業はシンプルで単調になりがちなのですが、杉本先生が時に鬼教官ように、あるいは熱血教師のように生徒を励ましながら、テンポ感を持って教えているので、不思議と途中から心地よい雰囲気になりました。

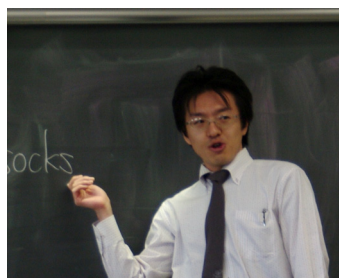
杉本：はい。ビシバシとやっています。というよりも、学生に対してやることを明確して、焦点化させるということが重要だと思うんですね。何か漠然と指示するよりも、「20秒で、この段落を読みなさい」と言った方が、何が重要で、何をやらないといけないかが明確になるので、結果として学生も授業に参加し、積極的になってくれています。もちろん、学生が分からないところなど立ち止まらないといけないところはありますが。

長嶺：授業が、どんどん進んでいくのに、学生からの質問や疑問がいろいろと出ていたのは、非常に良い雰囲気です。

杉本：この授業は比較的英語の能力が高い学生が受講しているということもありますし、少人数だということもあります。語学は、個々の能力を伸ばしていかないといけないので、どうしても少人数でならないと効果的な授業は難しいですね。

(長嶺宏作)

③ 熊木秀行助教：英語が話したくなる授業



熊木秀行助教の『英語Ⅳ』の授業を参観しました。学生は1年生のみ計22名でした。

長嶺：英語の授業なので当たり前かもしれませんが、できるだけ英語で指示・説明をされていましたね。

熊木：全て英語の説明では学生が理解できませんが、出来るだけ英語で説明することを心がけています。

長嶺：授業では身近なテーマになるように話されていましたね。例えば、loose(緩む)の音はルーズであり、ルーズという音はlose(負ける)という意味になるのでルーズソックスはおかしいよねと小話を入れて笑いを生んでいましたね。

熊木：英語の授業は単調になりがちなので、出来るだけ学生が振り向いてくれるようなトピックや話題を取り入れています。

長嶺：その点では学生が作業する時間が多くありましたね。

熊木：英語は学生が発音したり、書いたり、考えたりしないと伸びないので、学生が積極的に参加できるような授業を目指

ています。今回の授業でもビデオクリップを見せて、ディクテーションをさせたのですが、それをグループに分けて、学生同士で確認・相談させています。そうすることで授業に動きが出てきますし、授業についてけない学生も参加できるようになります。

長嶺：授業では、グループ分けでトランプを使っていますが、いつもトランプを使っているのですか？

熊木：トランプは便利で、あらかじめグループ分けしたい人数を決めておき、4人グループであれば、トランプの数字ごとに13グループまで作れますし、赤と黒であれば大きく2グループとかいろいろなパターンが組めます。学生が飽きたら、マジックを見せて学生の関心を引いたりしてるんですよ。

長嶺：楽しそうな授業ですね。その成果もあって非常に活発な発言のあるクラスでしたね。

熊木：英語は自分から話したいというのがなければ上達しないと思うので、学生の方から自然と声が出るような雰囲気にもっていかれたらと思っています。

(長嶺宏作)

4 H24年度前期授業アンケートの集計結果について

表1 国際関係学部授業アンケート科目別結果

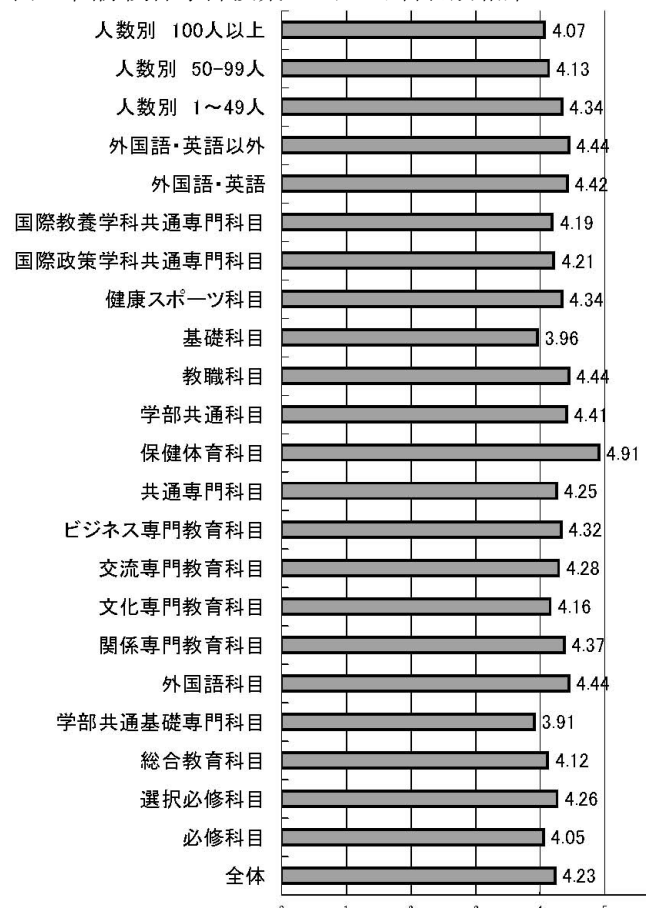
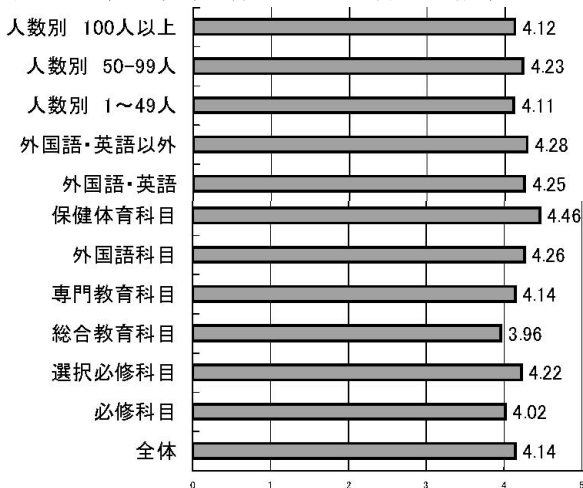


表2 短期大学部授業アンケート科目別結果



平成24年度前期の授業アンケートは表1・表2にある通りの結果となりました。前年度と比較して評価結果は、ほぼ横ばいといえます。引き続き各教員の授業改善の努力の結果だといえますし、大きな変化はなかったともいえます。詳細な結果については各授業担当者の個別の授業評価を参照し、授業改善に役立てていただければと思います。

(FD委員会)